

朝鮮の独立運動（三・一独立運動）



* 雑誌文庫 朝鮮叢報52「朝鮮叢報第51号」

解説

第一次世界大戦後、民族自決や民族独立の気運が高まりました。日本の植民地支配のもとにあった朝鮮でも、1919（大正8）年3月1日、京城（現ソウル）のパゴダ公園で民族代表の名で独立宣言文が発表され、公園に集まった人々は「独立万歳」をさけんで市街にくりだしました。これは三・一独立運動とよばれ、朝鮮全土に広まっていきました。

写真は、朝鮮総督府が発行していた一般向けの月刊誌『朝鮮叢報（ちょうせんいほう）』第51号（大正8年4月号）です。冒頭に三・一独立運動に関する二つの総督告諭が掲載されています。

3月1日付けの告諭では、「明後日（3月3日）に行われる故高宗の国葬においては、謹んで哀悼の意を表わすべきであり、決して喧噪にわたるような行動をとってはならない。もしも、人心を乱す言動をとる者があれば、総督の職権を以て厳重に処分する」と伝えています。

さらに、3月5日付けの告諭では、「さきに故高宗の国葬は静粛に行われるべきとの総督告諭を出したにもかかわらず、ソウルその他の地において、群衆による妄動をあえて行う者が出たことは遺憾なことである。これらの行動を取る者は、パリ講和会議で朝鮮の独立が列国に承認されたと言っているが、これは全く根拠のないことである」として、強い姿勢で鎮静にあたる旨を伝えています。

朝鮮総督府は、この独立運動を武力で鎮圧したため、多数の死傷者を出しましたが、運動はその後も長く続けられました。これに対し、日本政府は、言論・出版・集会の自由を一部認めたり、教育制度を拡充するなど、それまでの武力による支配を緩めました。